

The Gifted Vol.1 - The Haunting Woman (Jp)



(邦題『The Gifted Vol.1 - つきまとう女』)

Originally written in Japanese by Ryosuke Akizuki

Translated by Eiji Mihagino

Cover illustration by Makoto Sakuma

Cover design by Makoto Sakuma

Japanese edition copyright © 2013 Ryosuke Akizuki / The BBB: Breakthrough Bandwagon Books

English edition copyright © 2013 Ryosuke Akizuki / The BBB: Breakthrough Bandwagon Books

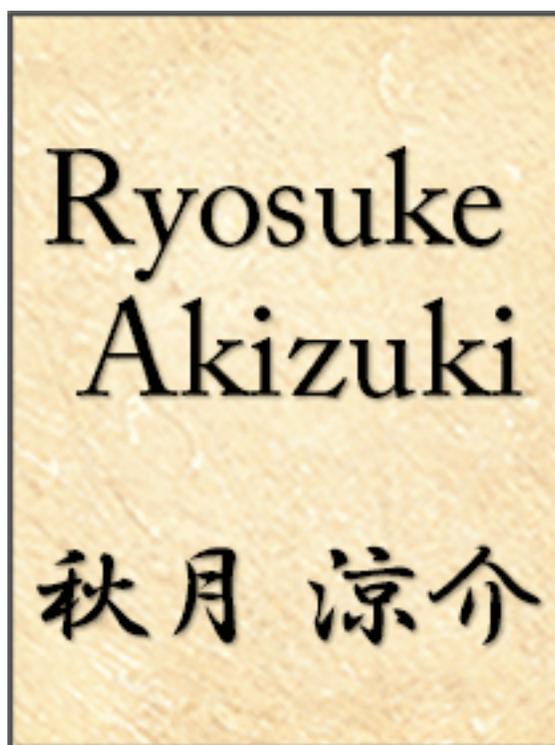
All rights reserved.

ISBN978-1-312-14497-2



The BBB ウェブサイト（日本語版）

<http://thebbb.net/jp/>



秋月涼介著者ページ

<http://thebbb.net/jp/cast/ryosuke-akizuki.html>

---

## Prologue

背後から忌まわしい視線を感じたような気がした。

エドワード・マーロンは、緩慢（かんまん）な動作で、後方を振り返る。

時刻は、二十三時十三分。静まり返ったマンションの一階。廊下に、人の気配は無い。

一気のせいかな……。

エドワードは、気を取り直すとエレベータ乗り場に向かった。

\*\*\*

翌日、エドワードは、仕事場からマンションに戻ってきた。時刻は、二十二時三十八分。新しい経理システムの立ち上げで、連日、残業が続いている。オートロックの扉を開け、屋内に入ると、いつものように廊下は、静寂に包まれていた。エレベータ乗り場まで、およそ十二メートル。自分の部屋の集合ポストの中身を確認し、エレベータに向かう。

「おい、エドワード」

エレベータに向かう途中、顔見知りの警備員、パブロが声を掛けてきた。ごく偶（たま）に一緒に飲みに行く間柄だが、このところ残業が多く、誘いを断ることが多かった。

「どうした、血相を変えて？」

パブロの表情を見ていると、ただごとではなさそうな様子が見て取れる。

「お前、何か怨みでも買ってるんじゃないか？」

「何だよ、藪から棒に」

「ちょっと、こっちに来てみろ」

エドワードは、パブロに促されるまま、警備室に入る。部屋の中には、マンションの各所に設置された八つの監視カメラが映し出す映像が音も無く流れていた。

「これを見てくれ。昨日の監視カメラの映像記録だ」

パブロは、そう言うと、一つのモニターの映像を切り替える。

「見てろ、二十三時十三分三十三秒の辺りだ」

エドワードがモニターに映し出された映像を見ていると、自分がマンションの扉を開け、屋内に入ってきた。集合ポストを確認し、エレベータに向かう。時折ノイズが走る十二メートルの白い廊下を、ゆっくりとカメラの方に向かって歩いてくる。モニターの左下には、現在の時刻が表示され、秒刻みで時刻がカウントアップされていた。

二十三時十三分三十四秒一画面の中の自分が、背後を振り返った。その後、首を傾げると、エレベータ乗り場に向かって、歩いていく。何の変哲もない映像だった。

「見えたか？」

パブロが、血の気の引いたような顔で、問い掛けてくる。

---

「何が？ 俺か？」

「違う。扉のところだ。二十三時十三分三十三秒に一瞬、映る。フレーム数にして、二フレームほどだ。いいか、次は、コマ送りにするぞ」

パブロは、映像を巻き戻し、再び、再生を始める。

二十三時十三分三十二秒。

パブロが、そこで映像を止めた。

「いいか、見てろ。この後だ」

パブロは、操作パネルに手を伸ばすと、映像を一フレームずつ先に送り始める。

二十三時十三分三十三秒。

エドワードは、両腕に急速に鳥肌が立っていくのを感じた。

扉の向こう、硝子（ガラス）の向こう側に突然、背の高い痩せ細った女の姿が顕（あらわ）れた。白い半袖のワンピースから生えた枯れ枝のような手足、おかっぱのような髪型で、黒い前髪は長い。その前髪の間隙から、異様に大きな右眼だけが覗いている。その眼は、じっと画面の中のエドワードを凝視していた。

「いいか、次のフレームだ」

一フレーム進めると、画面の中のエドワードが、一步、前進した。それに釣られるように瘦身の女の上半身だけが、入口の硝子扉を擦り抜け、屋内に顕れる。

ゾツとした。

「さらに、次のフレーム」

パブロが、そう言って、もう一フレーム進めると、女の姿は、画面の中から忽然（こつぜん）と消え去った。続けて、フレームを送ると、映像の中のエドワードが、コマ送りで背後をゆっくりと振り返る。

「おい、こいつは、何なんだ？ 女のように見えるが、幽霊（ゴースト）か？」

パブロが真剣な顔で、エドワードを振り返る。

「おい、パブロ。質の悪い冗談は、よせ。エイプリルフールは、とっくに終わってるぜ」

「馬鹿野郎。冗談で、こんな映像を作るかよ」

「いいや、こんな馬鹿なことがあるはずがない。俺は信じないぞ。無駄骨だったな。じゃあな」

エドワードは、パブロに向かって吐き捨てると、警備室を出て、エレベータ乗り場に向かった。

\*\*\*

二日後。

エドワードは、再び、一階の廊下で、パブロに呼び止められた。

---

「なんだよ、パブロ、また幽霊動画か？」

「エドワード、やばい。何だか解らないが、とにかく、やばいんだ。頼むから、警備室に来てくれ」

パブロの鬼気迫るような表情を見ると、流石にエドワードも不安を感じ、連れ立って警備室に向かった。

「見てくれ。これが、昨日の朝の映像だ」

時刻は、八時三十分。エドワードが出勤しようとして、マンションの廊下を歩いているところだった。

「この辺りだ」

パブロが映像を止め、一分ほどフレームをコマ送りにすると一突然、画面一杯に背の高い女の後ろ姿が映し出された。光を反射しない漆黒の黒髪は、首筋の辺りで、バッサリと断ち切られている。薄い生地ワンピースの下には、背骨の形がはっきりと見て取れた。

「そして、これが、昨日の夜の映像」

時刻は、十九時三十七分。久しぶりに早く帰宅することができ、マンションの入口で、偶然出遇った住人と会話をしているところだった。自分と、その女性が向かい合って、談笑している。不意に、エドワードの背後に、あの奇怪な女が顕れた。エドワードがカメラに向かって立っていたせいで、あの女の表情がくっきりと映し出されている。生気を感じられないその蒼白い顔は、見ているだけで、全身に怖気（おぞけ）が走る。女は、三フレーム目には、画面の中から消え去っていた。話をしていた女性は、あの女の出現に全く気が付いていないようだった。

「……気付いたか？」

パブロが、エドワードを振り返る。

「な、何に？」

「こいつ、目を追うごとに、お前の背中に近付いている。これが、一番最初に録れた映像だ。見ろ、だいたい五メートルくらい離れてるだろ？ 次が昨日の朝の映像—三メートルちょっとくらいに迫ってる。そして、昨日の夜—見ろ、明らかに朝より近付いている」

「お、おい、待てよ。そんな、そんな馬鹿なことが……」

エドワードは、思考がまとまらず、それ以上、言葉にならない。

「……おい、こいつが……こいつが、お前の背中まで辿り着いたら……お前はどうなるんだ？」

パブロの泣き笑いのような顔を見つめ、エドワードは何も言い返せなかった。

\*\*\*

それから、二日後、エドワードは勤務中に突然倒れ、意識不明に陥る。それから、間もなく、息を引き取った。検屍の結果、死因は脳溢血だったと公表された。

「ミロ、こんな話、知ってる？」

サヤ・トウマは、図書室で本を読んでいたミロ・バルツアの向かい側の席に腰を下ろすと、彼に話し掛けた。ミロは、サヤを一瞥（いちべつ）すると、すぐに視線を本に戻す。

「あのね、シティの歓楽街で、不気味な女の誘いを断ると、振った男の背後にその女の生き霊が取り憑くんだった。その生き霊は、監視カメラや写真にだけ写り、目には見えないの。それでね、そいつは、目を追うごとに、じわりじわりと男の背中に近付いていって——週間後に、男の背中まで辿り着くと……その男は、取り殺されちゃうの。怖いでしょ？」

「サヤの語り口って、いつもおっとりしてるから、全然、怖くないよ」

ミロは、相変わらず、本から視線を外さない。しなやかな細い指でページを捲っては、黙々と読み進めている。高校で一学年上のミロは、先輩ということもあるが、伶俐で冷静な雰囲気（まど）纏（まと）っているのだから、サヤには、いつも大人びて見える。

「だって、怖く話すと、話してるわたしの方が怖くなっちゃいそうで……」

「この世に、人間以上、怖いものなんてないだろう？ そんな幽霊とかの話で、一々怖がる必要なんて無いよ。それで——その話は、ただの都市伝説なの？ それとも、事件なの？」

「事件よ」

サヤが、はっきりと告げると、ようやくミロは、その端正な貌（かお）をこちらに向けた。象牙色のような淡い金色の前髪が、ふわりと揺れる。

「えっと——リカルドが調べた限りだと、似たような状況で発生した不審な死が、先月と今月だけで五件もあるみたい。死んだ男たちは、一様に、奇怪なおかつ頭の女幽霊に取り憑かれていたって噂なの。記録映像や写真も、ネット上に、いくつも上がってる。もちろん、捏造もたくさんあるから、真贋入り混じってるみたいだけど」

サヤは、リカルドから聞いてきた話を簡単にミロに伝える。

「警察の見解は、何かあるの？」

「死因は、四人が脳溢血で、一人が心筋梗塞みたい。だから、別に事件性は無いの。みんな、普通に成人病で亡くなったことになってる。リカルドが住んでるマンションでも、似たような事件があったみたいで、彼が共通項に気付かなければ、誰も気づいてないし、ただの都市伝説で終わってると思う」

「なるほどね。多分、能力者（gifted）の仕業だろうね。しかし、どうして、高次生命体（ハイヤー・スピリッツ）と接触した人たちは、あの力を呪詛（じゅそ）に使っちゃうのかな。祝福に使えば、幸せになれるはずなのに」

ミロは、残念そうにサヤの方を見ると、少し眉根を寄せる。

「みんな、自分のことしか考えてないんだよ……かく言う、わたしも、そうだったし」

サヤは、ミロから視線を外すと、机の上で組んだ両手を見下ろす。ミロの優しい声には、過去のサヤを非難するような雰囲気は全く無いのだが、サヤは、時々、過去の自分が許せなくなる。

---

生まれたときから完璧な人間はいないので、過去の自分を許すところから、新しい自分が始まる一と、ミロには、いつも言われているのだが、そう簡単には割り切れそうになかった。

「サヤは、人を殺さなかったんだから、良い方だよ。死んだ人間は、還ってこないからね。今回は、五人も殺してるんだろ？」

「うん、そうみたい……どうする？ 狩るの？」

「そうだね。警察だと対処できないだろ？ ぼくたちが狩るしかないね。放っておくと、被害者がどんどん増えそうだし」

「じゃあ、リカルドとクロエに連絡するね。集合は、今夜七時に、いつもの場所で」

「うん。じゃあ、また、今夜」

サヤが席を立つと、ミロは、読みかけだった本に視線を落とす。サヤは、ミロの横顔を少しだけ眺めたあと、図書室を出た。

## -2-

十八時五十五分に、サヤが、マンションの入口に到着すると、表にクロエ・ディレクが立っていた。すらりとした女性らしい美しい姿態（したい）に、自然と羨望を抱いてしまう。一度、家に帰ってから来たのだろう、クロエは、赤と黒のチェックのシャツに、濃紺のジーンズというラフな恰好だった。

「サヤ、お久しぶり」

クロエは、大きく右手を振ると、笑顔を浮かべる。左手には、買い出し品なのか、大きな白いビニール袋を下げていた。

「お久しぶり。リカルドは？」

「あの馬鹿は、いつも通りよ。七時を過ぎないと、降りてこないに決まってるわ。だいたい、あいつのマンションを集合場所に決めたのも、あいつがいつも時間通りに来ないからだね」

クロエは、呆れたようにぼやきながら、背後にあるマンションの入口を見遣（みや）る。

「そうね。ミロは、ミロで、時間ぴったりにしか来ないしね」

「あんたたち、一緒じゃなかったの？」

「うん。……わたしが、教室に迎えに行ったら、もう、ミロ、いなくなってて」

「怪しいなあ。きっと、女がいるよ。サヤ、のんびりしてると、他のやつにミロを取られちゃうぞ」

クロエは茶目っ気のある微笑を浮かべると、面白そうに言った。

「え、あ、うん。でも、わたしなんか……」

「お前、東洋系だけど、美人なんだし、もうちょっと積極的にいっても、大丈夫だって。あたしだって、もう七、八歳若かったら、ミロにアタックするよ」

「ええ？ クロエって、ミロのこと、好きなの？」

---

「なんか、ちょっと、ああいうやつ、神秘的でいいじゃない？」

「一何の話？」

「うわっ！」

クロエが驚いて、大袈裟（おおげさ）に仰け反る。サヤとクロエの目の前に、突然、ミロが顕れていた。

「お前、こんなところで、能力（gift）を使うなよ。誰かに見られたら、どうするんだ？」

クロエは、心配そうに辺りを見回している。頭を動かすたびに、後ろで結わえた鮮やかな金色の長い髪が、犬の尻尾のようにふさふさと揺れていた。

「周りに人がいないのは、確認済み。ちょっと、遅れそうだったから、つい、ね。で、七時だけど、リカルドは？」

ミロに言われて、サヤが時計を確認すると、十九時七秒だった。ミロは、本当に時間通りに、集合場所にやってくる。

「よう、おそろいで」

聞き慣れた声に振り返ると、マンションの中から、リカルド・アルバーニが出てくるところだった。

「あんた、珍しく早いじゃない」

クロエが、待っていたかのように嫌味を口走る。クロエは、サヤとミロに対しては優しいが、いい加減な性格のリカルドに対しては、いつも厳しい。

「俺も、心を入れ替えてね。偶には、早く来ようと思ってさ」

着崩した赤いシャツに、黒いスラックスという派手な服装で現れたリカルドは、中途半端な長さの栗色の髪を掻き上げる。仲間内で会うせいか、無精髭が伸びたままだった。

「あの、偶にはだと、全然、心を入れ替えてないような」

この辺りのいい加減さがリカルドの持ち味だとも思うが、サヤは、つい口を挟んでしまう。

「サヤは、細かい、細かいなあ。そんなことだと、男にもてないぞ」

「あんたみたいな、だらしない男には、頼まれてももてたくないっつーの。さあ、行こ、行こ」

クロエはリカルドの台詞（せりふ）をあっさり斬り捨てると、サヤの左腕を掴む。サヤは、クロエに引きずられるようにして、マンションの中に入った。

「やあ、リカルド、友達を連れて来て、今夜は、パーティか何かか？」

一階に入ったところで、警備員らしき男が話し掛けてきた。

「まあ、そんなもんだ」

リカルドは、暢気（のんき）そうに男に答える。

「そりゃ、いいな。今日は、午後九時であがりなんだ。その後で、俺も混ぜてくれよ」

---

「悪いな。部外者は参加できないんだ。ちょっと秘密のパーティなんでね。じゃあな」

リカルドの答えに、男は、一瞬、残念そうな顔をしたが、サヤはクロエに連れられて、エレベータ乗り場に向かう。四人がエレベータに乗り込むと、リカルドが口を開いた。

「今のやつが、二番目の事件の映像を見付けた警備員のパブロってやつだ。このマンションの住人だったエドワードってやつが変死した事件にまつわる映像で、くっきりと得体の知れない女が映ってる。俺があいつと直に交渉して手に入れた映像だから、出所は確かだ。あとで、見せてやるよ」

リカルドは、肩に提げた鞆を軽く叩く。どうやら、中には器材が入っているようだった。

「じゃあ、まずは、部屋に行くよ」

クロエは、エレベータの四階のボタンを押す。エレベータが上昇し、四階で停まると、次は、二階を押す。さらに、また四階。続いて、八階、十階、五階。五階に着いたところで、黒い帽子を目深に被った黒いワンピースの女が乗り込んでくる。クロエからは、絶対に話し掛けなくて、と言われているので、サヤは、その女が乗ってくると、いつも眼を合わせないようにしていた。最後に、クロエが一階を押すと、エレベータは、下降ではなく、上昇を始め、九階で止まった。

「さあ、早く、降りて」

クロエに急かされるまま、サヤは、ミロ、リカルドと共にエレベータを降りる。黒づくめの女は、微動だにせず、エレベータの扉が閉まると共に視界から消えた。

「じゃあ、九九九号室へ」

サヤは、クロエに従って、何も無い真っ白い廊下を歩いていく。この空間は、クロエの能力が創り出している異空間だった。クロエは、十階建て以上のマンションで、エレベータを使い、ある特定の階を移動することで、最後に出口を異世界に接続するという能力を持っている。

『異世界（エイリアン）エレベータ』と名付けられたその能力は、こういった秘密の打ち合わせを行う際や、一時的な現実逃避をする際に、とても便利な能力だった。その反面、神隠しや未来への時間移動といった得体のしれない都市伝説を生んでしまう能力とも言える。

クロエは、鍵の掛かかっていないドアを開けると、中に入った。部屋の中は、白一色で統一されていて、大きめのテーブルが一台と、椅子が六脚ほど置いてある。クロエは、ビニール袋の中から、飲み物とおつまみを取り出すと、テーブルの上に並べ始めた。サヤは、すぐにそれを手伝う。リカルドは、鞆からハンディビデオと小型のプロジェクタを取り出し、設置を始める。ミロは、鞆からモバイルのパソコンを取り出すと、机の上に置いて、電源を入れた。

「じゃあ、そろそろ始めようか。本日の議題は一リカルド、事件に名前は付けた？」

パソコンの準備が整ったのか、ミロは、リカルドに主題を尋ねた。

「そうだな、まあ、『つきまとう女』とでも、するか。まずは、この映像を見てくれ」

リカルドは、プロジェクタを使って、ビデオ映像を壁に投写する。問題の映像は、監視カメラの映像で、このマンションの一階を男が通過し、一度、振り返ったあと、そのまま画面外に消えるというものだった。

---

「これが、何？ どこが問題なの？」

クロエは、早速、ポテトチップスをつまみながら、白ビールを飲んでる。

「二十三時十三分あたりだ。次は、止める」

リカルドは、リモコンでビデオを操作すると、二十三時十二分で止めた。そこから、コマ送りを始める。

それが映った瞬間、クロエはくわえていたポテトチップスを口から落とす。サヤも、背筋に寒気が走ったのを自覚する。得体の知れない呪詛が、そこにいた。

「これ、こいつが背後に映ったら、一週間後に確実に死ぬの？」

ミロは、興味深そうに、映像の中の奇怪な女を指差している。

「きっちり一週間かどうかは判らない。ただ、一週間以内には、確実に死んでるな。あと、不思議なことに、こいつは、僅か二フレームしか顕れない」

そう言って、リカルドが、映像を一フレーム進めると、女の上半身は硝子戸を擦り抜けた。そして、次のフレームでは、廊下から消えていた。

「他の映像も、二フレームだけ？」

ミロは、パソコンを操作しながら、リカルドに問う。

「そうだな。このマンションの監視カメラは、計三回、この女を録画してるが、三回とも二フレームしか映っていない。あとは、別の事件で、銀行と駅の構内の監視カメラ、ホームビデオで、それぞれ、三人の男の背後に、これと全く同じ外見の女が映ってる。それらも、二フレームだけだった。駅構内の映像は、ネット上にアップしてあったのを拾って、裏を取ったが、男が死んだあと、後から合成してないとは言いきれない。銀行のやつは、映像をネット上で確認したあと、その銀行の警備員と交渉して、直に手に入れた映像だから、まず間違いなく本物だ。ホームビデオも、男の死後、自宅に行って、直にコピーさせてもらったから、本物だと言える。ホームビデオのやつは、昨日一日、部屋に籠もって、男が死ぬ前の一週間に録られた映像を全部チェックしていて、あの女が映ってるのを見つけた」

「とっても有意義な日曜日の使い方ね」

クロエが呆れたように肩をすくめる。

「うるせえな。こっちは、真剣なんだ。あと、一件は、写真に写っていた。こいつだ」

サヤは、テーブルの上に投げ出された写真に目をやる。幸せそうな笑顔で映った家族の写真。その中の一人、二十歳前後だろうか、ベンチに座った若い男の真後ろに、少し離れて、あの女の姿が写っていた。無造作に切り揃えられた前髪の間から、異様に大きな右眼が、恨めしそうに男を睨んでいる。

「心霊写真としての出来は、いまいちね。合成のように見えるわ。でも、本物だとしたら、寒気がする」

クロエは、ぶるっと両肩を震わせると、写真をリカルドの方へ滑らせた。

---

「こいつは、デジタルカメラじゃなく、フィルムで撮られていた。スキャン画像がネット上に公開された直後に、本人に会って、焼き増しをもらった。ネガの方にも、ぼっちり写ってたから、まあ、本物だろうな。話も訊いたが、写真を撮った日の三日前、午後九時半頃に歓楽街で変な女に、しつこく声を掛けられて、断ったことがあるそうだ。この男は……昨日、死んだよ」

リカルドの重い声が、室内にしんと響き渡る。

「やっぱり、高次生命体（ハイヤー・スピリッツ）絡みの事件と見て間違いないかな。法則に基づいて、人が死んでるとすると、悪霊だけの仕業じゃなくて、背後に何らかの能力者がいると思った方がいい」

高次生命体とは、四次元以上の高次元に生息する生命体のことで、彼らと接触することによって、某（なにがし）かの超常能力を手に入れた者たちを、サヤたちは霊媒、あるいは、単純に能力者と呼んでいた。高次生命体などと表現すると、得体の知れない者のように受け取り、怖がる人もいるかもしれないが、彼らとの接触や対話を経て、サヤ自身、自分たちが死ぬと、魂の状態になり、三次元の身体を脱ぎ捨てて、まずは四次元世界に行くことを知っている。その肉体の死の瞬間に、負の想念に囚われたまま、この世に未練を遺してしまうと、四次元に囚われてしまい、五次元以上の世界に還れなくなるばかりか、次第に魂が澱んでしまい、悪霊と呼ばれる存在にまで墜ちてしまう。そう言う意味では、悪霊も高次生命体の一種ではあるのだが、明らかに性質が異なるため、サヤたちは、意図的に高次生命体と悪霊を呼び分けていた。そう言った訳で、結局のところ、高次生命体というのは、死後、あるいは生まれる前の自分たちのことでもあり、その棲んでいる次元が高位の者ほど、他の次元に干渉する能力が高いというだけの話だった。そして、さらに言えば、高位の高次生命体は、守護霊（ガーディアン・スピリッツ）などとも呼ばれ、総ての人間に、必ず一人は憑いている。しかし、常人は、彼らを視るところか、感じることもできないのが普通だった。

「さて、どうやって、その能力者を捜すかだが……」

リカルドは、自分でグラスに白ワインを注ぐと、カマンベールチーズを囓りながら、半分ほど飲み干した。

「今までの事件をまとめてるんだよね？ まずは、それを見せてよ」

ミロは、リカルドに説明の先を促す。

「オーケー。ちょっと、待ちな」

リカルドは、鞆の中から、ノートパソコンを取り出すと、無線伝送で画面をプロジェクタに飛ばす。

「まずは、簡単に表を作ってみた」

\*\*\*

人名

日時／撮影場所／撮影媒体

日時／死亡場所／死因

1. バリー

---

五月十日七時五十四分／シティ中央駅／監視カメラ

五月十二日十五時三十分頃／勤務先にて死亡／脳溢血

## 2. エドワード

五月十六日二十三時十三分／自宅マンション入口／監視カメラ

五月十八日八時三十一分／自宅マンション入口／監視カメラ

五月十八日十九時三十七分／自宅マンション入口／監視カメラ

五月二十日十六時頃／勤務先にて死亡／脳溢血

## 3. ヘルベルト

五月二十五日十時二十二分／シティ銀行東駅支店／監視カメラ

五月二十九日十四時十五分頃／自宅にて死亡／心筋梗塞

## 4. キム

六月三日二十時三十七分／自宅／ホームビデオ

六月六日十五時十五分頃／勤務先にて死亡／脳溢血

## 5. グレグ

六月十七日十六時二十一分／中央公園／フィルムカメラ

六月十九日正午過ぎ／自宅にて死亡／脳溢血

\*\*\*

「少し幸運（ラック）を上げて、調査したからな。おそらく、この事件に関して、情報の漏れは無いはずだ」

どうやら、リカルドは、自分の能力を使って、情報を集めたようだった。日頃から、自分のために能力を使うと、反動が怖いと、よく言っているので、サヤは少し心配になる。

「こうしてみると、派手に殺してるわね」

クロエは、無表情でカマンベールチーズの一切れに手を伸ばした。

「でも、これで、一つ予想できることがあるね。こいつは、あの女の悪霊を、必ず一人にしか取り憑けられない。この災厄は、複数人に同時にばらまけないんだと思う」

「ミロの言う通りだ。一人始末すると、少し日を置いてから、次の奴を手に掛けている」

リカルドが、ミロの意見に賛同を示す。

「じゃあ、もしかすると、今、誰か取り憑かれてる人がいるかもしれないのかな？」

サヤは、あの奇怪な女が自分の背後にいるかもしれないと思うと、背筋に厭（いや）な寒気を覚える。

---

「そうね。今日が、六月二十日だから、その可能性はあるわね」

クロエが、少し顔を顰（しか）めて、即答した。

「あるいは、今、次の標的を物色してる最中かもね」

ミロは、思案顔で、何かを考えている。目の前のアイスマルクティは、あまり減っていなかった。

「どうやって、こいつを炙り出すかだな」

リカルドは、グラスの中の白ワインを空けると、さらにボトルからワインを注いだ。

「陳腐な作戦だけど、囷捜査がいいかな」

ミロは、少し困ったような顔で、リカルドを見つめた。

「ちょ、ちょっと、待てよ。何だよ、俺か？ 俺が囷なのか？」

リカルドは、驚いて、ミロを見返す。

「噂では、歓楽街などで出遇った不気味な女の誘いを断ると、死ぬってことになってる。女性を誘惑するのは、リカルドの得意分野じゃないかな？」

「いや、まあ、そこは、否定しないけどよ」

ミロの説明に、リカルドが臆面もなく答える。

「そこは、否定しろっつーの」

クロエが、小声で、ぼそっと零（こぼ）した。

「ぼくやサヤは、まだ、学生だから夜の歓楽街はまずいだろ？ それにクロエは女性だし。適任はリカルドしかいないよ」

ミロは、リカルドを説き伏せに掛かっている。若干、碧（みどり）の瞳が輝いて見えるのは、この状況を愉（たの）しんでいるせいかもしれない、とサヤは思う。

「そうそう、あんたしかいない。いっそのこと、呪いを受けて、死んじゃってもいいよ。あとは、あたしたちが巧くやっておくから」

クロエは、いつものように、辛辣（しんらつ）にリカルドを茶化す。白ビールは、ほぼ空いているので、少し酔っているのかもしれない。白い首筋は、淡い桃色に染まっていた。

「てめえ、他人事だと思って、簡単に言うなよ。こんな得体の知れない呪いが、気軽に受けられるか」

売り言葉に買い言葉だろう、リカルドは、僅かに怒りを顕わにしたように見えた。

「リカルドの能力って、自分に発動させると、その後の反動が怖いもんね。自分の能力で運良く命が助かって、あとで、事故死したら、意味が無いし……わたしも、この作戦は危ないと思う」

---

サヤは、リカルドを宥（なだ）めにかかる。実際、死に直結している能力なのだから、注意してしすぎることはない。

「サヤは、どっかの馬鹿女とは違って、優しいな。おじさん、惚れちゃうよ」

「馬鹿女って、誰のことよ！ あんたなんて、殺されても死なないくせに」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。リカルド、多分、大丈夫だよ。死因が、脳溢血や心筋梗塞なのは、この能力が物理攻撃型だからだと思う。精神攻撃型だと、こんな風に死因が綺麗に偏らないと思う」

ミロは、二人の間に割って入ると、持論を口にする。サヤには、何故、リカルドが大丈夫なのか、即座に理解できない。

「つまり、あれか？ こいつは、脳や心臓の血管を攻撃してくるってことか？」

リカルドが、訝（いぶか）しそうにミロに尋ねる。

「多分、物理攻撃力の弱いタイプなんだと思う。血管を切るのが、背一杯なんだよ。だから、サヤがそばに付いていれば、問題無い」

ミロが穏やかな口調で、力強く断言する。ミロの意見を聞くと、確かに自分の能力であれば、リカルドを護れそうだと、サヤは思う。

「サヤの身に何かありそうで、心配だわ」

クロエが、すかさず茶々を入れる。

「てめえ、そりゃ、どういう意味だよ」

リカルドも、すぐに反応する。

「ミロ、解ったわ。もし、リカルドが、こいつに憑かれたら、わたしがリカルドを護ればいいのね？」

サヤは、二人の言い争いが、喧嘩に発展する前に、話をミロに戻す。付き合いが長いので、この辺りの呼吸は、よく弁（わきま）えている。

「うん、そういうこと。なので、リカルドは、今晚から歓楽街を彷徨（うろつ）いて、ついでに情報も集めてみて」

「今晚からかよ。まあ、今朝は、出社ぎりぎりまで、たっぷり寝てるから、別にいいけどな」

リカルドが、面倒臭（めんどくさ）そうに、ぼやいた。

「善は急げって言うしね。誰か他の人に憑いてしまうと、死ぬまでに被害者を特定するのが大変だよ。あと、部屋にいるときは、ちゃんと自分の姿を録画しておいて。こいつは、いつ顕れるか、解らないからね。録った映像は、サーバーに置いておいてもらえれば、ぼくが毎日調べておくよ」

ミロは、そこで、ようやく目の前のアイスマルクティに手を付けた。

「解った。映像の確認は任せる」

---

リカルドは、どうやら腹を括ったようだった。

「あんた、女からの誘いは断るのよ。ほいほい、付いていくんじゃないわよ」

クロエは最後まで、リカルドに釘を刺すことを忘れない。

「俺が女からの誘いを断るなんて、ありえねえ。ああ、今日は、どうやら、ツイてないようだ」

「もし、巧く取り憑かれたら、わたしが傍に付いていてあげる。だから、リカルド、頑張っ  
てね」

サヤは、リカルドに向かって、背一杯の笑顔を向けた。場合によっては、リカルドの生死は、本当に自分が握ることになる。

「もう、おじさん、頑張るしかないわね」

クロエが笑顔で揶揄（やゆ）すると、リカルドは、ふて腐れたような笑みを浮かべた。

### -3-

リカルドは、マンションの前で、ミロたちと別れると、歓楽街へ足を運んだ。最寄りの駅から地下鉄に乗り、シティの中央駅で降りる。中央駅から南に広がる歓楽街の路地には、無数の飲み屋やバーが建ち並んでいる。この辺りを虱(しらみ)潰しに歩き回るだけでも、一週間以上、かかりそうだった。路地の間には、安っぽいネオンが灯り、酔客たちが、ゆらゆらと流れるように歩いている。

「ちょっと、そこのお兄さん、あたしと飲みに行かない？」

早速、背の高い化粧の濃い女が声を掛けてきた。普段なら、誘いに乗ってもいいかと思えるような女だったが、ミロたちとの約束がある。リカルドは、片手をあげると、女の顔だけを記憶し、無言で女の傍を通り過ぎた。結局、二十一時頃から、二時過ぎまで、歓楽街を練り歩き、十三回ほど声を掛けられたが、総てを断った。

「こりゃ、金がかからなくて、いい暇つぶしだな」

クロエが聞いたら、確実に皮肉られそうな台詞を吐くと、リカルドは、マンションに戻った。

翌日、リカルドは、いつも通り朝八時過ぎに部屋を出ると、九時前に会社に出勤し、仕事を終えたあと、再び歓楽街に繰り出した。昨日と同じように、違う路地を渡り歩き、零時過ぎには帰宅した。昨夜は、面倒だったので、自分を録画しなかったが、今夜から、寝室にビデオカメラを仕掛け、自分の姿を録ってみることにした。

一何が哀しくて、男の寝姿なんざ、録らなきゃならんのか。

リカルドは、ハンディカメラを三脚に固定して、部屋の隅に設置すると、録画モードにして、眠りに就いた。

翌朝、リカルドは、録画した映像データをサーバーに上げると、八時過ぎにマンションを出る。入社して、いつものように仕事をこなしていると、十七時前に、携帯電話が鳴った。ミロからだった。

「やあ、リカルド、体調はどう？」

---

「体調？ 至って元気、健康そのもの。ちょっと寝不足気味が珠に瑕(きず)ってところだな」

「そうか……あのさー」

「ん？ どうした？」

「昨日の録画の四時二十一分四十二秒に、あの女が映ってる」

「なにい！？ —おい、マジか？ 冗談だろ？」

「ぼくが冗談言うのって聞いたことある？」

「いや、あんまりねえな……って、確認するの早いな。六時間くらい録画されてただろ？」

「二倍速で見てたからね。意識を集中して見てれば、悪霊が映ってるところくらい感知できるでしょ？」

「そういや、そうか。俺は、素直に再生して見てたな……しかし、マジかよ。いつ、憑かれたんだ？」

「ぼくが知る訳ないだろ。心当たりは？」

「ありすぎて、判らねえ。二日間で、二十五人に声を掛けられた」

「全員の顔と名前は、記録してる？」

「美人は忘れないが、そうでもないやつらは、全部忘れた」

「こんな時に、冗談、言ってる場合？」

「冗談じゃねえ。あまく見ていた。まさか、こんなに早く釣れるとは思ってなかった。こんなツキは、いらねえって。おい、ミロ、どうする？」

「明日から、仕事、休める？ 今夜から、クロエの『異世界エレベータ』の部屋に籠もる。あいつ、あの部屋にも入ってこられるか、検証する。あと、リカルドを録画し続けて、何か法則がないか探ろう」

「解った。今日は、定時でふける。七時に俺のマンションの前に集合でいいな？」

「了解。ちょっと、サヤに、明日から学校、休めるかどうか訊いてみる。じゃあ、あとで」  
電話は、ミロの方から切れた。リカルドは、暫（しば）し、放心する。

—おいおい、サヤが学校サボらねえと、俺の人生、終わっちゃうのかよ？

リカルドは、なんだか、妙にもの悲しくなり、溜息を吐く。その時、妙な視線を背後から感じたような気がした。リカルドは、ゆっくりと後ろを振り返る。

「あ、リカルド、私に何か用？」

後ろの席にいたタツィアナが、嬉しそうに声を掛けてくる。

「あ、いや、何でもない」

リカルドは、ディスプレイに向き直ると、有給取得申請書を作り始めた。

サヤが途中で出遇ったクロエと一緒にリカルドのマンションに向かうと、リカルドが表で煙草を燻（くゆ）らせながら、そわそわと行ったり来たりを繰り返していた。

「おー、流石に今日は、出迎えありだな」

クロエが面白そうに、リカルドをからかう。

「遅えよ、お前ら」

「何言ってるの。まだ、七時、八分も前よ」

リカルドが忌々しそうに愚痴ると、クロエは、即座に言い返した。

「ミロは、どうした？」

リカルドは、いらいらしながら、腕時計を見据える。

「ミロは、いつも、時間ぴったりだから」

サヤが応えると、リカルドは、サヤの方を振り向いた。

「まあ、いい。サヤがいれば、とりあえず、死ぬことはないだろう」

「まだ、最悪でも二日しか経ってないし、大丈夫じゃないの？ あんた、びびりすぎ」

クロエが、呆れたように口を挟む。

「うるせえな。変なモノに取り憑かれた身にもなってみろ。くそ、確かに、四時二十一分に、奴が映ってやがったんだ。あの野郎、俺の可憐な寝姿を無料（ただ）で覗き見しやがって」

「あんたの寝姿なんざ、あの女くらいしか、興味持たないって」

クロエは、うんざりしたように肩を竦（すく）めた。

「うるせえよ。あの野郎、絶対、許せねえ。俺の貴重な有給を、こんなくだらないうちに使わせやがって！ 能力者を見付け出したら、ぶちのめしてやる」

「あ、ミロ、来たよ」

暗がりの中、ゆっくりと歩いてくる少年の姿が見える。だんだんと近付いてくる姿が、街灯の灯りの下で顕わになり、サヤの前に辿り着いたときには、腕のデジタル時計は十九時丁度を表示していた。

「ミロ、何、のんびりしてんだよ。俺の命が危ないんだぞ」

「あれ？ 七時集合って言ったのは、リカルドの方じゃないか。早い方がよければ、六時半とでも言ってくれれば、よかったのに」

「うっ、そうか。それは、すまん、俺が悪かった」

「そうそう、悪いのは、いつも、あんた。じゃあ、行こうか」

クロエはリカルドにオートロックを開けさせると、真っ先にエレベータに向かっていく。サヤは、ミロの後に続くと、マンションの中に入った。

\*\*\*

九九九号室は、いつものように閑散としていた。一見、何も無いように見える白い部屋だったが、電気、ガス、上下水道は、完備してある。配管は空間を越えて、総て元の世界のクロエのマンションに接続してあるらしく、供給には問題が無い。異世界とはいえ、台所も、トイレも、風呂も、何ら遜色無く使えるように創られていた。

クロエは、買い物袋をテーブルの上に置くと、食器棚からグラスと小皿を用意する。ミロは、食べ物テーブルの上に広げられるのを待ってから、話を切り出した。

「とりあえず、相手の得体が知れないから、今日から、ここに泊まり込むことにする。クロエは、会社が休めないから、補給と調査担当ね。リカルドは、ビデオカメラの画角から、絶対にはずれないこと。トイレのときも、背後だけは、映しておくこと。サヤは、リカルドが攻撃されたら、すぐに助けること。サヤの睡眠中に襲われると、厄介だから、睡眠はぼくと交互に取ることにする。夜は、ぼくが起きてるから、サヤとリカルドは眠っていいよ。サヤはリカルドから離れられないから、クロエがいないときに、何か用事があれば、ぼくが外に出掛ける。何か質問は？」

「リカルドとサヤを二人っきりにするのは、危ない」

ミロの説明が終わるや否や、クロエが即座に口を開いた。

「お前な、真顔で言うな、真顔で」

リカルドが、クロエを指差し、すぐさま抗議する。

「クロエ、大丈夫だよ。リカルドは、そんな人じゃないし。それに、もし、襲われたら、自分の舌を噛み切って、リカルドを殺しちゃう」

「サヤ、お前、怖いこと、さらっと言うなよ、さらっと」

「冗談だよ」

サヤは、にっこり笑って、リカルドを見つめる。しかし、自分の能力を使えば、リカルドを簡単に殺せるのも事実だった。

「冗談に聞こえないんだよ、お前の能力の場合は。だが、まあ、それは、いいとして、クロエは、何を調査するんだ？」

リカルドの問いに、ミロが答える。

「一応、歓楽街を回ってもらおうつもり。リカルドが通った経路を見てもらって、不審な人物がいないか確認してもらおう。あと、写真を撮ってきてもらって、リカルドには首実検をして欲しい」

「なるほどな。まあ、写真を見れば、どの女に出会ったかは、思い出さだろう」

「じゃあ、この作戦でいいかな？」

ミロが、みんなを見渡す。

「うん。いいと思う」

サヤは、すぐに賛同した。

「いいわ」

クロエも、異論は無いようだった。

「俺もいいぜ。一じゃあ、これから、何して遊ぶ？ しばらくは、相当暇だぞ」

リカルドは、方針が決まると、話題を変える。

「なんだか、みんなで旅行に来たみたいで、いいよね。わたし、モノポリーがいい」

サヤは、家族の元を離れて、女子寮に住んでいるので、気の知れた仲間と一緒に過ごす時間が増えるのは、嬉しかった。

「モノポリーかよ。ミロが異様に強いから厭なんだよな。こいつ、絶対、未来の独裁者だぜ」

リカルドが、ミロを指差して、野次る。

「ひどい言われようだなあ。リカルドが、いつも後先考えてないだけじゃないか」

「わたし、今日こそは、ミロに勝ちたいの」

サヤが、そう言うと、クロエが呆れたように呟（つぶや）いた。

「……あんたたち、さっきの危機感は、どこに行ったのよ」

## -5-

ミロとリカルドと一緒に九九九号室に籠もって、三日が経過していた。その間、サヤはリカルドとゲームをやったり、トランプをやったりして、楽しく過ごしていたが、それは、単に危機感を紛らわそうとしていただけのように、サヤには思っていた。

部屋には、ビデオカメラが三台用意してあり、一台で二時間半録画する。一番のカメラが二時間に達したところで、二番のカメラで録画をし始め、二時間半に達したところで、一番を止め、録画内容を確認する。二番のカメラが二時間に達したところで、三番のカメラで録画を始め、二番のカメラの録画内容を確認する。三番のカメラが二時間に達すると、今度は再び、一番のカメラで録画を開始する—というローテーションで、ミロは、切れ目無く映像を確認していた。ミロが眠っている間は、リカルドが、それをやっているのので、退屈になったサヤは、本を読んだり、一緒になって録画映像を確認したりしていた。

最初に、あの奇怪な女がビデオの録画に映ったのは、日を跨いだ深夜二時三十三分四十二秒だった。サヤとリカルドは眠っていたので、ミロがそれを見付けていた。

「やっぱり、空間を越えて干渉してくるようだね。あるいは、完全に背後に憑かれてる」

ミロは、映像の中の女を見つめ、興味深そうに言った。

「この女、全く俺の好みじゃないんだよな。勘弁して欲しいぜ、まったく」

リカルドは、うんざりしたような表情で、画面から目を逸らした。

「昨日の四時に映ったときよりも、一メートルちょっと近付いてるな。この距離を測ってみるか」

ミロは、そう言うと、リカルドに座る場所を指定し、その背後から、床に目盛りを書いていった。それから、リカルドを横から撮影できるように、カメラの位置を移動する。

次に、あの女が映像に顕れたのは、二日目の十三時三十九分四十二秒だった。リカルドの背中からの距離は、およそ二メートル六十六センチ—深夜二時のときよりも、また少し近付いていた。再出現期間は、十一時間六分だった。

さらに、日を跨いで三日目。零時四十五分四十二秒に、あの女は再び映像の中に出現した。リカルドからの距離は、およそ一メートル九十九センチ。約六十七センチほど近付いていた。

「また、十一時間六分後に映ってるみたい」

サヤは、計測した時間をミロに報告する。

「やはり、出現に法則性がありそうだね。今日で三日目だから、あと、二、三日で、リカルドは、死ぬことになる」

「馬鹿言うな、助けるよ。サヤ、頼むぞ、ホントに」

「次の十一時間六分後は、十一時五十一分四十二秒だね。ぼくたちが、あの女を監視しているのに、あの女が出現し続けるってことは、能力者は、あの悪霊を殺害対象にただ取り憑けているだけか、あるいは、あの霊が見つかって自分も安全だと高を括っているのかもしれない。次回は、この時刻に注目してみよう」

\*\*\*

そして、三日目の十一時五十一分三十五秒—。

サヤは、ミロと共に固唾（かたず）を呑んで、リカルドの背後を肉眼で凝視している。時が一秒ずつ刻まれていく。あと、五秒、四、三、二、一一。

ふっと、目の前にあの奇怪な女が顕れた。サヤの両腕に瞬時に鳥肌が立つ。背筋に悪寒が走る。しかし、それは、刹那（せつな）のうちに、この空間から掻き消えた。

「ミ、ミロ、見た？ 今、わたし、あいつが見えたよ」

サヤは、思わず、興奮して、ミロに言った。

「うん。ぼくにも見えた。やっぱり、あいつ、この次元に実体化してるな。だから、ビデオや写真にも写るんだ。光を反射してる」

ミロが冷静に事象を分析する。

「つまり、そりゃ、物理攻撃が可能ってことか？」

リカルドは、思い付いた疑問を口にする。

---

「でも、二フレームの間に攻撃するのは、人間業じゃないよ。やはり、能力者を直接叩くのが正攻法だろうね」

ミロが、リカルドの問いに答える。

「でも、どうやって、能力者を探すの？ あいつ、もう、一メートルちょっとまで近付いてる。次か、次の次で、きっと、もう攻撃の射程圏内だよ」

サヤは、心配そうにリカルドを見た。あの女の枯れ枝のような腕は、もう少しでリカルドの頭に届きそうだった。

「正確に言うと、おそらく、今は、リカルドの背中から一メートル三十三センチ二ミリの位置だね。とすると、明日の十時三分四十二秒に、リカルドは脳溢血確定かな」

ミロが、あっさりと言げると、リカルドは、あからさまに表情を曇らせた。

「お前、爽やかに言うなよ。本当にサヤの能力で防げるんだろうな？」

「うーん、確証は無いね。攻撃対象が死ぬまで執拗（しつよう）に攻撃してくるタイプだったら、ちょっと厳しいね。サヤの能力は、治癒じゃないから」

「じゃあ、どうするんだよ。このままだと、マジ、やばいって」

今はそこに何もいないことは解っているはずだが、リカルドは、落ち着き無く、背後を振り返る。

「いや、そんなことないよ。もう、能力者の正体は判ったし。ぼくは、徹夜だったから、一眠りするね。起きたら、クロエと一緒に、そいつに挨拶に行こう。じゃあ、おやすみ」

「え、ちょっと、ミロ、待って」

サヤは、反射的にミロを呼び止める。何がどうなって、誰が能力者だと判ったのか、解らない。

「おい、待てよ、寝るな。どういうことだ、説明しろ」

リカルドも、慌てて、ミロを追及する。

「あとで、あとで。説明したら、すぐに殴り込みに行くでしょ？ クロエがいないと、どうせ、始末がつけられないんだから、知るだけ無駄だよ。じゃあ、今度こそ、おやすみ」

ミロは、床の上のマットで横になると、気持ちよさそうに寝息を立て始めた。

-6-

「一で？ 誰が能力者なのさ？」

サヤが眠っているミロを見守っていると、午後六時前に現れたクロエが、問答無用でミロを揺すり起こし、開口一番に尋ねた。

「ん？ ああ、クロエか、おはよう」

ミロは、眠そうに瞼（まぶた）を擦（こす）っている。

---

「こんばんは、ミロ。お前、能力者の正体が判ったんだって？」

クロエは、起き上がったミロの正面に座り込むと、先を促す。

「ああ、うん」

「どうやって？ お前、ずっと部屋でビデオ観てただけだろ？」

「そうだね。でも、こいつ、出現パターンに法則性があるから、わりと簡単に推理できるだろ？」

「どういうことだ？ 誰が能力者だ？」

リカルドが食いつくように、ミロに詰め寄る。自分の生死がかかっているのに、気が気ではないのだろう。サヤも、ミロの貌を見つめ、じっと答えを待つ。

「パブロだよ」

ミロは、あっさりと言い切った。サヤを含む三人が、その回答に啞然とする。

「パブロ？ あの警備員か？ 男じゃないか」

リカルドが、訳が解らないといった面持ちで、ミロに言い返す。

「男だって、男を誘うだろ？ 理詰めで考えると、パブロしかいないんだ」

「……どういうこと？」

クロエも、納得ができないという面持ちで、ミロを見つめていた。

「法則を検討すればいいんだよ。あの女は、どういう間隔で出現してるのか？」

「えっと、十一時間六分だよね？」

サヤは、ミロの問いに、すぐに答える。

「うん、そう。一で、十一時間六分は、何分だっけ？」

「……六百六十六分か」

リカルドが、落ち着かないような素振りで呟いた。

「そういうこと。しかも、あいつは、約六十七センチ間隔で近付いてる。これも、きっと正確に測れば、六百六十六ミリずつ近付いてるんだ。おそらく、次は、丁度、リカルドの背中から六百六十六ミリの位置に出現する。その次、ゼロ距離になったときに、攻撃してくる」

「でも、どうして、パブロが能力者だって言えるの？」

サヤには、その理屈が、よく解らない。

「え？ だって、法則が決まってるんだから、遡（さかのぼ）ればいいだけだろ？」

ミロは、驚いたように、サヤを見つめた。

「え？」

---

サヤは、茫然とミロを見返す。

「えっと、最初にリカルドのカメラに写ったのが、六月二十二日の四時二十一分。秒数は常に同じ四十二秒だから、確実に六百六十六分で、再出現してることになる。一つ前に遡ると、二十一日の十七時十五分。二つ前は、二十一日の六時九分。三つ前は、二十日の十九時三分だろ？ 二十日のぼくたちの集合時間は、何時？」

「あ、そっか。午後七時—十九時だ」

確かに、サヤは、ミロが突然目の前に現れたときに、時計を確認している。時刻は、十九時七秒だった。

「ぼくたちは、集合時間の少し後に、パブロと出遇ってる。しかも—リカルドは、その時、彼の誘いを断ってる」

「待てよ。何で、その時に、あの女が憑いたって断定できるんだよ。他の時間の可能性もあるじゃないか」

リカルドが、ミロの言い分に反論した。言われてみれば、確かに取り憑かれた時刻を、あの時だけに限定などできない。

「他の可能性は無いよ。だって、他の五件を見比べても、必ず同じ法則に則ってる。死亡時刻は、はっきりしてないけど、ほぼ十一時間六分周期の近辺に散らばっている。こいつは、対象を殺すまでに、十一時間六分間隔で六百六十六ミリずつ、じわじわ詰め寄って来るという性質があるだろ？ もし、能力者が意図的に殺すまでの時間と距離を操作できるなら、こんな妙な法則で、死ぬまでの時間をあえて引き延ばす意味は無い。そう考えると、この能力には、相手に悪霊を取り憑けてから攻撃するまでに、一定の時間と距離が必要だということが解る。この制限を考慮すると、映像に録られてから、死ぬまでの最長記録は、ヘルベルトのケースで、九十九時間五十四分だから、四日と三時間五十四分までは、死なないと言える。そうなると、リカルドが取り憑かれたのは、二十一日の午前六時九分の十一時間六分以前になる。リカルドは、朝は八時過ぎまで自宅にいるから、その二つ前の—六月二十日午前七時五十七分には、まだ部屋にいて、誰とも会ってないはずだよね？ それとも、この日、誰か女性を部屋に連れ込んでた？」

「連れ込んでないって。サヤ、そんな眼で俺を見るのは、やめろ」

サヤが無意識に目を遣ると、リカルドが慌てて、言った。

「まあ、この日は、出社ぎりぎりまで寝てたって、自分でも言ってたしね。あと、前日の六月十九日は、一日中部屋に籠もって、あの女が映ったホームビデオを検証してたわけだから、六月十九日に取り憑かれることもない」

ミロは、淡々と自説を唱える。

「六月十八日の可能性だってあるだろ？」

リカルドが、即座に思い付いた意見を言う。しかし、ミロは、それを平然と受け止めると、流れるように語り始めた。

---

「その可能性は、無いよ。こいつは、九分九厘、標的は一人しか選べない。つまり、誰かに憑いているときは、他の人は安全だ。ネット上にばらまかれた映像を見て、複数の死者が出ている様子が無いところを見ると、映像からの伝染の可能性も低い—この女、六月十八日には、まだ、グレッグの背中に憑いている。それに、グレッグの死から逆算して、変な女に声を掛けられて断った辺りを呪詛の開始地点と考えると、ぼくが考えている出現回数は十回の法則にぴったり一致する。……こいつ、六六六に拘りがあるみたいなんだよね。実は、パブロと出遇った二十日の十九時三分は、丁度、到達日から逆算して、十回目に当たる時なんだ。つまり、標的からの距離は、六メートル六十六センチで、百十一時間前、すなわち六千六百六十分前だね。いかにも、こいつの好みそうな呪詛の開始地点だろ？ さらに言えば、出現期間が二フレームなのは、多分、66.6ミリ秒だけ、この世界に顕れてるからなのかな—なんて思ったりもしてるんだ」

ミロは、そう言うと、その拘りに呆れたように僅かに微笑んだ。

## Epilogue

パブロ・コルサは、追い詰められていた。よもや自分と似たような超常能力を持つ人間が身近にいるとは、思っていなかった。四月の下旬にこの能力に目覚めて、すぐにパブロは、不可抗力で愛するバリーを失った。そのあと、エドワードを使って、この能力の仕組みを理解したところまではよかったが、バリーの代わりになる男は見つからず、女装をして深夜の歓楽街を彷徨き、誘いを断られる度に、都度、相手を殺していった。逆らえば、殺すと脅しても、誰もパブロの言いなりにはならなかった。だから、殺した。だが、どうやら、そのツケが巡ってきたようだった。

警備室の外には、リカルドを含む四人の男女が立っていた。パブロを殺人の容疑で、非難している。端正な顔立ちの少年が、訳の解らない論理で、理路整然とパブロを追い詰めてくる。悪霊のナタリアは、まだ、リカルドの背後に憑いているし、彼女は、取り憑いた標的に対して、六千六百六十分経たないと攻撃できないという制約を持っていた。こいつらには、自分がナタリアを使役していることが知られている。もはや、この四人に直接手を下して、逃げるしか方法が無かった。パブロは、腰のホルスターに挿していた拳銃を引き抜くと、即座に、目の前の少年の額に照準を合わせた。

「安全装置を外さないと、撃てないよ」

パブロに向かって、少年がにこやかに告げる。パブロは、慌てて、拳銃の安全装置を外す。安全装置を掛けた覚えは無かった。

「だから、安全装置を外さないと、撃てないよ」

少年に銃口を向けたところで、再び、そう告げられる。拳銃に視線をずらすと、外したはずの安全装置が、再び掛かっていた。パブロは、内心で慄然（りつぜん）とする。

「大人しくするなら、ひどい目には遭わさないけど、抵抗するなら、ちょっとひどい目に遭わせるよ」

邪気の無い表情で、怖ろしいことを言う。パブロは、再び、銃の安全装置を外しに掛かった。

その瞬間、顎の真下から、強烈な一撃が見舞われる。視界が暗転し、視点が定まらない。銃は、取り落としたのか、掌（てのひら）の中に無い。

---

「えっと……両肩でも、撃ち抜いておく？」

壁にもたれ掛かったまま、少年の方を見遣ると、その手には、パブロの拳銃が握られていた。

「わ、解った。参った、降参だ。許してくれ」

パブロは、跪（ひざまず）くように頰（くずお）れると、少年に向かって、懇願した。

「じゃあ、まずは、リカルドに憑いてる、あの女を解除して」

パブロは、一瞬、躊躇（ためら）った。ナタリアを解除したら、殺されるような気がしたからだ。

「解除して」

少年は、抑揚（よくよう）無く同じ言葉を繰り返す。そこには、得体の知れない威圧感があった。

「と、取り引きをしよう。リカルドから、ナタリアを解除する代わりに—」

その瞬間、左肩を撃ち抜かれた。いつ銃を構えたのかも判らなかつた。至近距離で放たれた弾丸は、左肩を貫通して、壁にめり込み、弾痕を残す。パブロは反動で吹き飛び、後方の壁に叩き付けられた。

「次は、眉間（みけん）だね。ぼくはゼロ距離で撃てるから、絶対に外さないよ。別にあんたが、あの女を解除しなくても、あんたが死ねば、能力は解除されるしね」

パブロは少年の穏やかそうな表情の奥に、微かな殺意を嗅ぎ取った。その怜悯な眼差しに戦慄を覚える。

「ま、待て、解った。か、解除する。だから、撃たないでくれ」

パブロは、涙を零しながら、懇願する。痛み of のせいなのか、恐怖 of のせいのかも判らなかつた。

「い、今、解除した。本当だ」

「あんたの後ろに、愛しのナタリアは、出せるのかな？」

少年は、銃を構えたまま、静かに問う。

「ああ、攻撃を解除すれば、普段は俺の傍にいる。だから、出せる」

「じゃあ、解除した証拠として、出してみて。リカルド、写真を撮って」

パブロがナタリアを背後に顕すと、黒髪の少女が一瞬、眉を顰める。リカルドは、持っていたデジタルカメラを構えると、ナタリアに向かってシャッターを切った。

「撮れた？」

「ああ、ばっちりだな」

リカルドは、液晶画面を確認して、頷く。

「じゃあ、次は、エレベータに乗って」

少年は、拳銃を警備室の出口の方に向け、パブロの退室を促す。

「エレベータ？ な、何故だ？ まずは、傷の手当をさせてくれ」

「傷？ もう、そんなものは無いよね？」

少年の言葉に、はっとして、パブロは、自分の左肩を眺める。弾丸が貫通し、骨が砕け、肉が弾けていた左肩の傷は、何事も無かったかのように綺麗に消失していた。何が起きているのか、全く理解できない。ただ、相手も自分と同じような超常能力の持ち主だということだけは理解できた。だが、それが、より一層、パブロの恐怖を煽る。

「はい、エレベータに乗って」

パブロは、少年の言うがままに、一階のエレベータ乗り場に向かう。上昇ボタンを押すと、エレベータが降りてきた。パブロは促されるまま、エレベータに乗り込む。四人は、パブロを見守るように、エレベータの外に並んで立っていた。

「じゃあ、さよならだね」

少年が淡々と呟く。

「お元気で」

黒髪の少女が哀しそうに表情を曇らせる。

「生きて再び会うことがあったら、どこに行ってきたのか聞かせてよ」

金髪の女が不穏な台詞を口走る。

「じゃあな。お前とナタリアのツーショットは、有効に使わせてもらおうぜ」

リカルドが片手を上げたところで、エレベータの扉が、音も無く閉まった。

パブロは、すぐさま、地下二階のボタンを押す。地下二階には、駐車場があり、パブロは、そこに車を停めていた。しかしエレベータは、四階を目差す。

「くそ、どうなってるんだ。こいつ、この、くそったれ！」

パブロがいくらボタンを連打しようと、エレベータは、動きを止めない。四階、二階、四階、六階、十階と移動し一そして、五階で、唐突にエレベータが停止した。扉が、ゆるりと左右に開く。飛び降りようと思った矢先、目の前に、黒い帽子を目深に被った黒ずくめの女が、冷気を纏って佇んでいた。

ゾッとする。

気配が、ナタリアのそれと同じだった。この女は、こちら側の存在では無い。

パブロは、思わずエレベータの奥に退く。女は、無言で中に入ってきた。エレベータの扉が閉まり始める。パブロは、狂ったように喚きながら、女の横を擦り抜けて、扉から外に出ようとした。しかし、扉は、強力な力で閉じられる。パブロは、箱の中で、黒ずくめの女と二人きりになった。

女は無言だった。

---

パブロは、腰が抜け、だらしなく床に座り込んでいた。女の右腕が影のように動き、一階のボタンを押す。エレベータは一何故か、上昇を始める。

六階、七階、八階、九階—そして十階。

エレベータは、その動きを止めると、扉が滑らかに左右に開いていく。

そこで、女がパブロの方に顔を向けた。表情は見えなかったが、何故か、嗤（わら）ったような気がした。女が、エレベータを出ていく。蹠音も無く、滑るように。その瞬間、パブロは、何か強烈な力に左足首を掴まれた。

「うわあ！」

パブロの絶叫が箱の中に木霊（こだま）する。しかし、抗（あらが）うこともできずに、エレベータの中から引きずり出される。目の前には、あの黒ずくめの女が立っていた。何者かに足首を掴まれたまま、パブロは絶望に喘（あえ）ぎ、這うようにして、エレベータの方を振り返る。

エレベータの扉は、緩やかに閉じ—そして、視界から跡形もなく消えた。

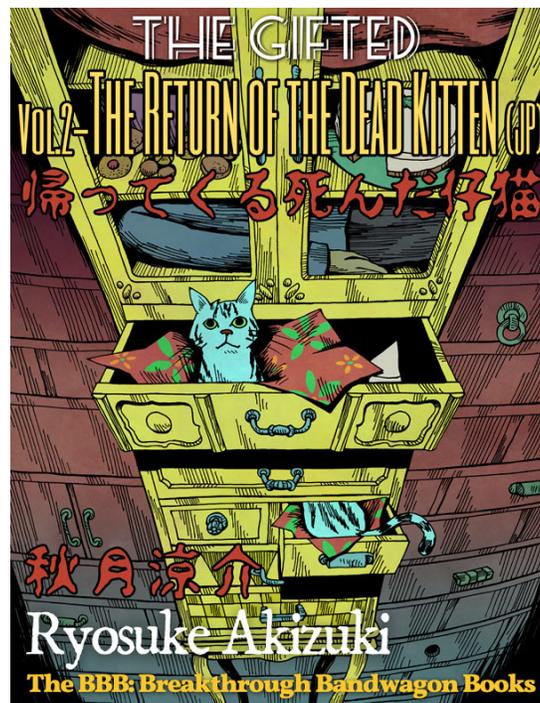
了

\*\*\*

（本書は、The BBB: Breakthrough Bandwagon Books のために書き下ろされたオリジナル作品です）

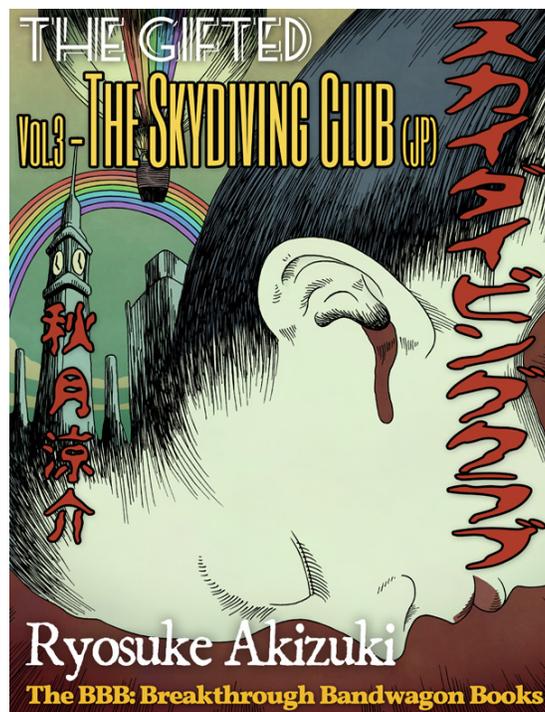
---

## The BBB での秋月涼介著作リスト



The Gifted Vol. 2 - 帰ってくる死んだ仔猫

<http://thebbb.net/jp/ebooks/the-gifted-vol2.html>



The Gifted Vol. 3 - スカイダイビングクラブ

<http://thebbb.net/jp/ebooks/the-gifted-vol3.html>

---